

## 『妙正寺文庫』について

——小栗栖香頂関係資料追加寄贈の報告——

木 場 明 志 (教授・国史学)

本学図書館には『妙正寺文庫』が設置されている。そこには、昭和40年(1965)に大分市中戸次の真宗大谷派妙正寺から寄贈を受けた書籍群が架蔵されてきた。内容は、妙正寺13世住職で近代大谷派の傑物に数えられる小栗栖香頂師(天保2～明治38、1831～1905)に関わる、『八洲日曆』(自筆日記)57冊を中心とする、師の自筆書および公刊著作50部124冊である。これらの架蔵本の内からは、故柏原祐泉本学名誉教授の選定によって、『宗名往復録』が『真宗史料集成』第10巻「法論と庶民教化」(同朋舎、1978年刊)に、『天恩広大』が『明治仏教思想資料集成』第2巻(同、1980年刊)に、『喇嘛教沿革』『真言宗大意』が同第5巻(同、1981年刊)に重要史料として翻刻収載されてきた。また、本文庫架蔵本を底本としてはいないが『喇嘛教沿革』は影印復刻版(続群書類従完成会刊)が出され、『真宗教旨』は戦後においてもいわゆる海賊版が台湾で刊行されている。

ついで、先年の平成16年(2004)4月、その『妙正寺文庫』に妙正寺および同寺檀徒の総意に基づく約1,000部1,500冊の新たな追加寄贈を戴くことができた(書籍群の仮目録は平成15年度に本学大学院仏教文化専攻生有志が作成した)。従来の文庫冊数を大幅に上回る、妙正寺所蔵小栗栖香頂師関係資料のすべてにあたる書籍群である。4月に妙正寺において小栗栖香頂師百回忌法要が厳修されたことを記念して、蔵書を一处に置くことで散逸を防ぎ、かつ今後の研究に資するために、追加寄贈が同寺および同寺役員・総代の方々の総意によって決定されたのである。同寺および関係者の高い見識に敬意を払わずにはい



小栗栖香頂肖像

られない措置である。後述するように、小栗栖香頂師関係資料には計り知れない価値があることが近年明らかになっている。

師については、従来は宗政家と扱われてきた(『真宗人名辞典』『日本仏教人名辞典』)。明治6年(1873)および9年に上海に渡航し、上海を拠点に中国国内の宗教事情を視察。同時に東本願寺上海別院を開創して日本仏教界による中国布教の端緒を開いたこと。明治20年代以降は関東を中心に各地に盛んに巡回法筵を行い、同38年3月の示寂と同時に学寮講師を追贈されたことが知られている。

しかし、師は実は学僧としても位置づけるべきである。このたび追贈の資料群の紹介とあわせながら、師の略歴を紐解いてみよう。天保2年(1831)生まれの師は、豊後日田の咸宜園(漢学塾)に学んで漢詩・儒学に優れて三才の一人と謳われた。漢籍資料の多さがこれを示している。その後、22歳からの9年間は東本願寺学寮に在籍して俱舎・法相・華嚴・天台の学問を修めて宗学(真宗教学)研究に及んだ。その後は『大乘起信論』『真言十卷章』『真言五教章』を中心に八宗の学問を

大成し、慶応元年(1865)に初めて学寮で『真言十巻章』『十住心論』を講じ、明治元年(1868)に学寮擬講に任じられた。こうした修学時代に購入した本には、一々購入年月日、代価、読み始め、読み終わり日の記入と、本文に多くの朱傍線が施されており、当時の宗学研究の範囲の広さが余すところなく知られる。ところが、師は明治維新に遭遇して学寮の伝統的なあり方に疑問を抱き、学寮講者は名利の対象と化していると批判して擬講職辞退を申し入れた。一年の大半を京都に拘束される講者にはできない、広く社会で行動することを目指すとして、同5年(1872)に東京に移る。東京では早速、時勢の十五条を浅草本願寺に住する法嗣現如上人に献策し(連枝欧米留学、本山移東、大学東西設置、三講者廃止など)、「真宗」宗名回復のために大隈重信を説いて、ついに宗名公許を実現した。「宗名は宗祖親鸞聖人による名乗りであって、政治の関与するところでない」(『八洲日曆』)とする今なお通用する優れた主張をしたのであった。翌年には公用で赴いた長崎で中国語を学び、そのまま上海から中国に入って天津を経て北京に至り、龍泉寺本然和尚に師事し、寺庵に下宿して中国語習得と仏教事情視察の1年間を送る。喇嘛僧、中国僧らと親交をもち、またキリスト教やイスラム教の調査にも及んだ(『支那教派大意』)。

実は先に寄贈を受けていた『妙正寺文庫』には2度の中国渡航時代の資料は完全に抜け落ちていた。安政5年(1858)1月から示寂2週間前の明治38年(1895)年3月に及ぶ日記『八洲日曆』にしても、164冊のうちの57冊であって中国滞在中の分は無かった。借り出されたものであろうとの見当はつくものの、追跡の方法はないように思われていた。しかし、近年になって師を清朝末期の中国仏教に影響を与えた日本僧として評価する研究者(武蔵野大学陳継東専任講師)が現れ、妙正寺小栗栖法秀住職の協力を得て行方の調査を

図り、遂に師の姪光子の嫁ぎ先、久留米市永福寺に日記の残り分をはじめとする中国滞在中資料が現存することが判明した。中国語学習の記録、中国仏教の実情、諸宗教の状況などが詳細に記された一級資料が多数発見されたのである。資料価値は大谷派一教団としての範囲をはるかに越え、19世紀後半の中国語学習法(初級学習法)、清末仏教の様相(日本仏教との余りの差異)、中国国内事情(中国庶民の生活習俗)を鮮明に映すものである。日記も164冊中161冊が揃うことになった。

師は高血圧症を発症して同7年8月に中国を離れ、2年後には自ら編纂した中国布教テキスト『真宗教旨』を携えて谷了念らと再び上海に渡り、東本願寺上海別院を創設して自ら中国語で説教を行い、あわせて中国語説教を行う日本人青年僧育成の学校(江蘇教校)を設置した。高血圧症の悪化で翌年3月に已むなく帰国し、以後5年間は自坊で療養生活を送る。病状がやや回復した同16年(1883)、本山は学寮講師就任を拒む師を上等教校教授に任じた。宗学と普通学とを修する当時の宗門内上級学校である。しかし、これも2年で辞して社会教化に専念する道を選び、同22年(1889)からは関八州教学策新委員長として、関東を中心に主に東日本の地方教化に邁進する生活に入った。このころの説教は随行者によって記録され、『蓮舶法話』60冊として残存する。また、貴婦人法話会(師が創めた三条実美夫人を筆頭とする上流女性の聞法会)の月例講話は多くが活字冊子化されている。講師就任を嫌った師に対し、同28年(1895)には終身講師待遇が与えられた。また、同29年(1896)に顕在化する清澤満之師ら東京留学経験者が先導した教団改革運動に際しては、いち早く東京を拠点に活躍した66歳の老教学者として教学重視の立場から理解を示し、弟の小栗憲一(京都大谷中学校第5代校長)からの逐次報告によって清澤満之師の僧籍剥奪処分を知り、「ああ、これより本山は



八洲日曆

滅亡の域に接せん」(『八洲日曆』)と嘆いた。当時の「教学」の用語は、「教」は布教、「学」は学事研鑽を指し、布教は学事に裏付けられて成果があり、学事は布教のためにこそ研鑽されねばならないとするもので、師は学事振興が布教の実に結びつくと考えていた。また、福沢諭吉邸に真宗説教に招かれて説教後に交わした問答には、功利主義者福沢に対して懇切に浄土の実在を説くなど、優れた教学者としての師の面目を見せている。

今ひとつ、師の晩年の事績として、同32年(1899)からの中国仏教を代表する楊仁山との真宗教学をめぐる論争がある。師の『真宗教旨』を読んだ楊がその念仏だけとする撰択・廃立的立場に疑問を呈し、經典に見えない偏りを懸念して自著『評真宗教旨』を送ってきたことが発端である。初めは楊と親交深かった南条文雄師に持ちかけられたが、当代第一の教学者として名声のあった香頂師に委ねられたもので、師は『陽駁陰資弁』『念仏円通』を執筆して応えた。それに対して楊は『評陽駁陰資弁』『評小栗栖念仏円通』を著して反駁するなど論争は続いたが、師の病状悪化によって論争は学寮の龍舟に引き継がれた。楊はこれ以上は無用と論争を打ち切ったが、双方の仏教の見識の高さと仏教研究への熱意が生んだ論争であった。師の名声は中国仏教界に聞こえ、『真宗教旨』は1937年の上海での刊行まで3回も中国で出版された書であった。最晩年の5年間は巡回説教・講演を

一切止め、宗祖に倣って念仏と浄土莊嚴觀察の生活に入り、同38年(1905)3月18日に示寂、本山は同日付で講師を追贈した。師について、近代中国仏教改革の第一人者太虚法師の高弟芝峰法師は、1937年の再刊『真宗教旨』に序文を寄せ、「師は教の為、人の為に尽くした龍象の日本僧であった」と賛辞を連ねている。

師は上述の略歴だけではどうい評しきれない人物であるが、今回の追加寄贈書群によって幕末期から日露戦争期までの約半世紀の日記が揃い、従来は点描に過ぎなかった激動の時代の連続した真宗事情、仏教界事情、政界との繋がり、中国仏教との交渉などを知る手がかりが提供された。また、それぞれの単冊の自筆資料は情報に溢れ、購入本や中国要人との交渉によって入手した中国書、例えば北京雍和宮の喇嘛教活仏から贈られた『禅門仏事』などには、その事情と、入手日付などが記載されていて恰好の研究素材となる。

尽くせないことであるが、『妙正寺文庫』追加寄贈を戴いた妙正寺とご関係の方々に深甚の謝意を評し、これらの文庫収納書籍群が今後の学術的研究に資する重要価値の若干を指摘して、追加寄贈の報告にかえる。